ラテン語とフランス語 4

名言・金言による比較言語学

秋山 学

今月は，ウェルギリウス（B.C. 70–19）と並んでローマを代表する詩人，ホラティウス（B.C. 65–8）を取り上げてみようと思います．この２人は，生涯変わらぬ友情に結ばれていました．２人とも独身を貫き，詩作技巧の錬磨に生涯を捧げたという点でも共通しています．もっとも，詩の深みに関してホラティウスはもちろんウェルギリウスを敬愛してやみませんでしたが，詩芸の点ではホラティウスがウェルギリウスを凌駕しかつ導き手となる，という関係にあったと言えるでしょう．晩年のホラティウスの作品は，内容的にも技巧の面でも，ラテン詩が到達し得た前人未踏の完成度を示していると言っても過言ではありません．

ホラティウスは「捕らわれの身となったギリシアが，粗暴な勝利者を捉え，野卑なラティウムに技芸をもたらした」（Graeca capta ferum victorem cepit et artes / intulit agresti Latio）（『書簡詩』*Epistulae*，第２巻 1. 156–7）などの，人口に膾炙（かいしゃ）した詩句で有名ですが，彼の真の傑作は『歌章』（*Carmina*，全４巻）であり，そのなかでも最後の第４巻は「珠玉」と言うにふさわしい芸術作品です．

［原文］ nosque et profestis lucibus et sacris / inter iocosi munera Liberi / cum prole matronisque nostris / rite deos prius adprecati / virtute functos more patrum duces / Lydis remixto carmine tibiis / Troiamque et Anchisen et almae / progeniem Veneris canemus. /

［仏訳］ Et nous, jours ouvrables et jours sacrés, parmi les dons du joyeux Liber, avec nos enfants et nos mères de famille, nous adresserons aux dieux les prières rituelles, puis, alliant nos vers aux flûtes lydiennes, nous chanterons, à la façon de nos pères, les chefs qui ont vécu vaillants, et Troie, et Anchise, et la postérité de la fécondante Vénus.

［拙訳］ われわれもまた，週日祭日を問わず / 快活な酒神の賜物に満たされ / 子供や妻たちとともに / 厳かにまずは神々に祈りを献げ / 父祖に倣い，武勲を果たした武士らを / リュディアの葦笛に乗せた調べで / またトロイアを，アンキセスを，そして慈しみ溢れる / ウェヌスの御子（アエネアス）を，ともに歌おう」（*Carmina* IV. 15. 25–32）

これは，『歌章』第４巻の最後の歌（第 15 歌）の末尾の部分です．原文では８行に及

ぶこの一節，定動詞は末尾の canemus（われらは歌おう）一語しかなく，すべてが文末に至って完結する，という構造になっています．それを補完する形容詞動詞とも言うべき分詞主格形も adprecati のみです．これは「能相欠如動詞」adprecor（祈る）の分詞形で，対格目的語 deos（神々に対して）を取っています（近代語でこの文法カテゴリーに相当するのは「代名動詞」もしくは「再帰動詞」でしょうか）．そして canemus の目的語として duces（武士ら），Troia，Anchises，そして progenies（子孫）が，いずれも対格形に置かれています．これ以外の部分には奪格句，前置詞句が散りばめられ，ラテン詩特有の絢爛たる詩的空間が構築されていますが，仏訳では ‘alliant nos vers ...’ 以下の部分で，原文の語順を変えて訳さざるを得なかったと見えます．

さて『歌章』は全部で4巻から成っていますが，1巻から3巻までが合本として公刊されたのに対し（B.C. 23），第4巻はその後しばらくして公にされています（B.C. 13）．最初の3巻に対して第4巻が大きく異なる点は，この間に親友ウェルギリウスが亡くなり（B.C. 19），その遺作『アエネイス』が公にされたということでした．ホラティウスは亡き友の遺作から大きく影響を受けながらも，ローマを代表する桂冠詩人としての座につきます．そして紀元前17年に執り行われた「世紀祭」では，式典を締めくくる「世紀祭の歌」（*Carmen Saeculare*）を作詩し，かつその合唱隊を務める少年少女たちの指導と指揮を委ねられる，という栄えある立場に立つことになります．この「世紀祭」は，オクタウィアヌスによる「ローマの平和」の実現を記念するという意味をも持っていました．カエサルの養子オクタウィアヌスは，ユリウス家の一員として，はるかアエネアスの息子ユールスの血統を継ぐ者とされました．したがって，アエネアスと古きローマの栄光を国民が一致して歌うということは，オクタウィアヌスの栄光をことほぐことをも意味しています．上に引いた「ともに歌おう」（canemus）という言葉には，そのような様々な意味が込められていますが，同時に，ウェルギリウスによる『アエネイス』の冒頭が ‘Arma virumque cano’（わたしは歌う，武具（戦い）と一人の英雄を）で始まることもあり，その『アエネイス』を（われら国民が一体となって）「歌おう」と呼びかけている，とも解することができるでしょう．

ホラティウスは，同じ『歌章』第4巻の第6歌において，「世紀祭」での自らの栄誉を思い起こし，歌隊の女子に呼びかけるかたちで，こう歌っています．‘nupta iam dices ‘ego dis amicum, / saeculo festas referente luces, / reddidi carmen, docilis modorum / vatis Horati.’’（ほどなくしておまえがお嫁に行くとき，おまえは言うだろう，〈わたしは神々に悦ばれる歌を献げた．世紀がめぐり，祝祭の日を繰り返すときに，詩人預言者ホラティウスの調べを教わって〉と）．（*Carmina* IV. 6. 41–44）

童心あふれるホラティウスの素顔が見えるようで，ほほえましくはありませんか．

（あきやま・まなぶ）